

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

平成 24 年 1 月 15 日

派遣者氏名（専門分野）	呉（豊山） 亜希（ 南アジア美術史及び考古学 ）
-------------	--------------------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	西インド仏教石窟寺院の基礎的研究—美術史及び考古学を軸とした学際的アプローチ—
-------	---

派遣期間

平成 23 年 7 月 25 日 ～ 平成 23 年 9 月 25 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	イギリス	ロンドン	大英図書館	入館証取得による機関利用のため、受入研究者は特になし
	イギリス	ロンドン	ロンドン大学 SOAS 図書館	同上
	イギリス	ロンドン	国立美術図書館	同上

派遣先で実施した研究内容

今般の派遣プログラムにおいては、派遣者の現職である日本学術振興会特別研究員としての研究テーマであるインドの石窟寺院に関して、特に 19 世紀後半を中心に、当時のインドの宗主国イギリスによって収集・記録された史料を重点的に調査することを主眼に置いた。

インドの石窟寺院への関心は、史料の現存状況から見る限り、17 世紀以降に西欧がインド進出を本格化させるとともに増していったと考えられる。その関心の集大成であるとともに、現在の石窟寺院研究の定本となっているのが、19 世紀後半を中心に、主に宗主国イギリスの手によって刊行された論考や英領インド政府考古局の報告書である。この頃までに確立されたインドの石窟寺院に関する基礎知識は、造営時期が紀元前 3～紀元後 8 世紀頃にわたることと、石窟建築の大規模化と壁画や彫刻による荘厳形式の発展が、特に 5 世紀以降顕著になったということであった。注意しなければならないのは、この理解がイギリスのオリエンタリズム的な文明観に根差していることである。つまりここでは石窟寺院の変遷とは、古代インド文明の進化と、それらを 19 世紀という「現代」へ向かって廃墟化させるに至ったインド（＝東洋）の墮落を歴史化した語りなのである。

このように、植民地主義的な観点において確立された石窟寺院の理解は、現代インドにおいても影響力を保ち続けている。具体的には、石窟寺院のうち「進化の途上」にあって「美的価値」に欠けるとみなされた 5 世紀以前の造営例（＝前期石窟寺院）は、全現存例のうち圧倒的多数を占めるにも関わらず、文化財としての保存はおろか、分布状況の把握など基礎資料の整備すら不十分で、自然的要因による損壊だけでなく人為的改変も進行している。ユネスコ世界文化遺産リストに登録されている、アジャンターやエローラーといった 5 世紀以降の造営例（＝後期石窟寺院）とは対照的である。この現状は、ポストコロニアル状況の現代インド社会において、人々が自らを取り巻く環境を、コロニアルな価値判断に影響されつつ規定していることを示している。

こうした問題意識を踏まえると、インドの石窟寺院が近代西洋によって「発見」され東洋性の

象徴とみなされるようになり、イギリスの帝国主義の展開と関連しながら、コロニアルな価値判断のもとで、歴史化された知識体系へと構築されていく過程が、コロニアルな文脈における史料調査から明らかとなる可能性が見えてくる。また、石窟寺院研究という知識体系が孕むコロニアル性を明らかにすることは、単にコロニアル・ヒストリーとしての言説研究において成果を提供するにとどまらない。ポストコロニアル性の超克を模索する現代インドが文化アイデンティティを脱構築するためには、その価値観に内包されるコロニアル性に向き合うことは不可避であり、旧宗主国イギリスにのみ所蔵されている一次史料の検証が不可欠である。派遣先にイギリスを希望したのは、これらの理由による。

派遣先都市ロンドンにおいて訪問した研究機関は、大英図書館、ロンドン大学 SOAS 図書館、国立美術図書館（ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館内）の 3 機関である。特に、大英図書館内の旧インド省図書館と呼ばれるセクションには、インドの石窟寺院に関してイギリスが蓄積してきた一次史料が多く所蔵されていることから、派遣期間中ほぼ毎日訪問して史料調査を実施した。閲覧した史料は主に、軍人・医師・商人・宣教師・画家など、インドの石窟寺院を実見したイギリス人の紀行文や王立アジア協会などにおける講演録、スケッチ、写真といった記録の刊行本および未刊行史料、18 世紀以降にイギリスを含む西欧で好古主義やオリエンタリズムの興隆を反映して発刊された定期刊行物、さらに英領インド最盛期の 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて編纂・刊行された調査報告書や地誌事典である。

さらに、こうした「インド美術史」というナラティブ形成との影響関係を視野に入れると、当時のイギリスが植民地において収集した文物を、知識体系としてどのようにその支配に応用しようとしたのかを、具体的な史料から考察する必要があると考えた。そこで、主に国立美術図書館に所蔵されている、植民地の文物の取扱いや価値判断に関して交わされた議会記録や書簡、植民地インド博覧会をはじめとする文化行政の目録や関連刊行物についても、調査を実施した。これら訪問先機関における史料調査に加えて、派遣期間中にロンドン市内の美術館においては、『国家のための美術』展（ナショナル・ギャラリー）や『水彩画』展（テート・ブリテン）など、イギリスの帝国主義と美術の展開について考察した特別展が複数開催されていた。これらは派遣者の研究テーマに密接に関連していることから、観覧を行うとともに最新の関連資料を入手し、近年の研究動向についても調査した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

当初の研究目的は、インドの旧宗主国イギリスに所蔵された一次史料を調査することによって、インドの石窟寺院研究が内包してきたコロニアル性を明らかにすることにあり、研究計画においては、インドの石窟寺院に関連する史料を主な調査対象としていた。しかしながら、派遣期間中に研究を進める過程で判明したのは、現在では美術史家が主な担い手である当該研究領域が、宣教師、軍人、商人、医師などといったアマチュア好古家によって形成されてきたことを示す史料状況であった。それらの史料において、インドは自然科学や宗教的関心から言及され、植民地の文化行政に大きな影響を与えていることが理解された。

このことから、派遣期間中の調査対象に、植民地の文化行政に関する史料を新たに含めることとし、それによって石窟寺院研究のコロニアル性を、より実証的に論じるための資料を充実させることができた。その意味で、今般の派遣によって、当初の研究目的と計画以上の成果を達成できたものとする。またそれは石窟寺院研究のみならず、派遣者が現在参加している、英領インド期の商業集団マールワリーに関する研究を進めるうえでも、イギリスと在地社会との文化交渉を明らかにするために重要な史料で、派遣後の研究発表に早速活かされている。

さらに、当初の研究計画には含めていなかった研究活動として、博物館における特別展の観覧と関連資料の入手が挙げられる。これによって近年の研究動向について知識を得るとともに、最新の研究資料を入手できたことは、実践的な研究活動を実施することを可能にしてくれた OVC プログラムであればこそその成果であり、今後の研究に大きく活かしていきたいと考える。

裏面へ続く

派遣後の研究発表の予定

1. 「ハヴェーリーからみたマールワリーと〈故郷〉のローカル社会の関係性―視点・表象・伝統をめぐって―」日本南アジア学会第24回全国大会、大阪大学、平成23年10月2日
2. 「植民地経験の表象としてのハヴェーリー: 英領インドにおける商業集団マールワリーの文化交渉実践」関西大学文化交渉学教育研究拠点第4回次世代国際学術フォーラム、関西大学、平成23年12月11日
3. 「マールワリーの邸宅ハヴェーリーの壁画装飾からみる植民地経験とグローバリゼーション」現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 (MINDAS) 研究会、福岡アジア美術館、平成24年2月4-5日
4. “Cave Temples as the Imagining of India: The Negotiation between Early Modern Indian Tradition and Colonial Knowledge,” The 33rd Congress of the International Committee of the History of Art, Congress Centre Nuremberg, 15-20 July 2012.